宇宿貝塚

【所　在　地】奄美市笠利町宇宿字大籠 2300 － 1 他
【種　　別】国指定史跡
【指定年月日】昭和 61 年 10 月７日

↑敷石住居跡　　↑成人女性の埋葬状況

奄美大島の北端に位置する縄文時代後期から弥生時代後期にかけての貝塚である。発掘調査によって８層に分かれた文化層が確認された。注目されるのは，奄美諸島の土器である宇宿上層式土器と弥生時代後期（千数百年前）の土器が，さらに宇宿下層式土器と縄文時代後期（約 3,500 年前）の市来式土器が同じ層から伴って出土したことである。このことから奄美大島と本土とは長期間にわたって文化の交流が行われていたことが明らかになったのである。

遺構は，宇宿上層式土器を伴う住居跡２基，埋葬跡，面縄東洞式土器を伴う住居跡１基が発見された。宇宿上層式の住居跡は南北に約 10m 離れているが，ともに一辺が２ m あまりの方形の住居跡で，周囲を礫で囲っている。面縄東洞式の住居跡は，宇宿上層式の住居跡の下層から発見された直径２ m の円形の敷石住居跡である。床面は大小の礫を平らに並べてあり，中心付近に深さ 30cm の船底状の炉が設けられ，木炭片や有機物が検出された。

埋葬跡は砂丘の最高地点で発見されたが，調査の結果，宇宿上層式の時期の母子の埋葬跡であることがわかった。成人女性の遺体は，あおむけで体を伸ばした状態の仰臥伸展葬という形で埋葬され，両膝の間に新生児の遺体が埋葬されていた。成人女性の骨の耳から後頭部にかけて，46 点のガラス製の小玉などが首に懸けた状態で発見されている。

宇宿貝塚は，南西諸島の先史文化を解明するうえで貴重な遺跡であり，国指定史跡として整備されている。